
近くて遠い異世界

あぶ〜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

近くて遠い異世界

【Nコード】

N1122I

【作者名】

あぶ

【あらすじ】

役目を終えた魔王は、さっさと消えるべきだ。それが魔王イルンテスの考えである。そして彼は役目を終えた。事後処理も頼んだし、後顧の憂いは一切ない。だから勇者の剣を受け入れた。後は逝くのみ……。なのに、今度はどこぞへと召喚されてしまった。しかも『勇者』として。さて、どうしよう

ブログ 一つの終わり（前書き）

初投稿なので今後どうなるか予想がつきません。
いろいろご容赦ください。
苦情は受け付けます。

プロローグ 一つの終わり

星空が綺麗だ。俺を見下ろしている瞳も綺麗だな。

この役目を負ってからどれ位の時が流れたのだろう。

百年？ 二百年？ いや、もっとだろうな。

思えばいろいろなことがあった。……ははっ、昔過ぎて思い出せねーや。

「魔王よ。覚悟してもらおう！」

覚悟？ そんなもんとづくに出来てるさ。むしろこの瞬間を心待ちにしていたくらいだ。さっさと……、いや、まだ言い残すことがあったな。

「勇者殿、三つほどよろしいか？」

「……いいだろう。なんだ？」

おいおい、ちょっとは警戒しろよ。これだから正義を妄信している連中は……。まあいいや。

「では一つ目」

「……」

「この城には様々な書物を集めてある。どれもこれも貴重なものばかりだ。だがそれゆえに争いの種になりやすい。だから勇者殿が管理してくれ。もしそれが適わないのなら構うことはない、全て燃やしてくれ」

「……」

「二つ目はここに集められた生贄たちだ。彼らは被害者だ。一応どこに出ても生活できるように仕込んであるけど、いきなり外で

生活しろって言っても無理がある。後ろ盾になつてくれ」

「……ああ」

「最後に、俺に止めを刺したら大々的に公表してくれ。『魔王は滅びた。しかし、人心が乱れるとき再び現れるであろう』と。細かいところは任せるよ」

「……わかった」

「ありがとう」

これで全て終わりだ。

長い長い役目がようやく終わる。

後はどうにでもなれだ。もう俺の知るところじゃない。

「願いは可能な限り聞き入れる。その上でひとつ訊ねてもいいか？」

なんか物腰が丁寧になったな。

「……なんだ？」

「あなたのお名前を……」

ああ、そういえば名乗ってなかったな。結構前から魔王って呼ばれてたせいですっかり忘れてた。

別に名乗ったからといって不都合はないだろう。

「……俺の名前はイルンテスだ。魔王の名前だ、すぐに忘れてしまえ」

「！……勇者イルンテス……」

驚いた。よくそんな昔のことを知っているもんだ。……まあ、記録には残っているか。

「そんな風に呼ばれた時代があったな。過去のことだ」

そう、過去のことだ。勇者と呼ばれ英雄と呼ばれ、最終的には魔王と呼ばれる。いや、自分で魔王を選んだんだっただな。

「名乗ったんだ、冥土の土産に勇者殿の名前を教えてくれ」

図々しいかな？ でもこちらは名乗ったんだ。自分を殺してくれる人の名前を知ってもいいだろ。

「私の名前はリユース。リユース・ダンケンライトです」

「リユースか、いい名前だ」

本当にいい名前だ。素直にそう思える。

「では、勇者リユース。そろそろ俺の命を持っていつてもらえるか？」

「……わかりました。魔王イルンテス、あなたの命を貰い受けます！」

結構ノリがいいなコイツ。

ヒュ
グシュ

腹に剣が突き刺さる。痛みはあまり感じないけど、体の中を何か突き抜けるって感じは気持ち悪いな。

ん？ 顔に何かが……。雨か？

「……っ、えっ……ぐしゅ」

おーおーばろばろ泣いちゃって。綺麗な顔が台無しですよ。
魔王に止めを刺したんだ。満面の笑みで勝ち誇ればいいものを
んで泣いていますかねこの勇者殿は。

……それだけ心優しいってことか。やはり、リユースに止めを刺
してもらって正解だったな。

あとはリユースとここにいる生贄たちに任せよう。

ゴポン

あ、口から血が出ちゃった。

「ひっ……えう……ひっ」

あーもう！ もうちょっとびしっと決まらないものかなあ。まあ、
俺らしいと言えばらしいけどさ。

だけどこのままだと、リユースの心にでっかい傷痕残しそうでや
だな。

どうしよう？

んー、声は出そうにないな。手足も動きそうにないし、かろうじ
て動くのは顔だけか。

そうだ！ 笑おう！ いい笑顔で逝こう！ きつとそれがいい。
俺にもリユースにも。

「ー」

……やった！ 笑ってくれた。
涙でぬれてるけどいい笑顔だ。
これで安心して逝ける。

ありがとう。さようなら。

「もったいない。役目が終わったんなら私のためにちょっと働け」
この期に及んで誰だよ。

プロローグ 一つの終わり（後書き）

なんか、もう、ありきたり

第零話 狭間の世界にて

何だこの空間は？ 白いか黒いのかよくわからん。
ん？ 俺以外にも誰かいるのか？

「あら、よくわかったわね」

……

「反応くらいしなさいよ。ノリが悪いわね」

喋ってないんだけどな。

「ええ、あなたは喋ってないわよ」

じゃあなんで会話が成立してるんだ？

「あなたの思考を読み取ってるのよ」

……

「本当にノリの悪い子ね。ここは『スゲー！』とか『なぜだー！』とかいろいろ驚くところよ？」

……ここが『死後の世界』ってやつか。薄気味悪いところだな。

「へえ、この私を無視するんだ。いい度胸ね。あなたみたいな悪い子にはお仕置が必要ね！ えいっ！ー！」

そんなかわいく言われたって……って、な、なんだ！？ 体が、ち、縮む！？

「あゝん、5歳くらいかしら？ なんてきゃわいいのっ！」

ガバツ！ スリスリゝ

あ、こらっ！ だ、抱きつくな！ 頬擦りやめろー！
ってゆーか元に戻せえー！！

「えゝ、こんなにきゃわゆいのにいゝ。……どうしても？」

どうしてもだっ！ 第一、鎧のサイズが合ってなくてひどい不恰好になってるだろうが！ それに、華麗に重ねた俺の年を返せ！

「……確かにそれじゃいろいろ不便ね。っという訳で、えいっ！」

そうそう、素直にそうすれば……

「やっぱりいい素材だといい男になるわねえゝ」

何の冗談だ？ 俺は元の姿に戻せて言っただぞっ！？
それになんだこの姿は？ よりにもよって一番粋がってて恥ずかしい時期のじゃねーか！

「そうよ。それが一番あなたが力を出せる年齢。ちなみに、私達の望みが叶うまで成長できませーん」

う、嘘だろ！？

「嘘じゃありません」

あああああああ、いやだあああああ！！

「ハイハイ、埒が明かないのさつさと話を進めます」

勝手に進めるな！ 元に戻せ！！

「ハイハイハイ、元に戻すための方法教えますから黙って聞いてくださいね」

う……、わ、わかった

「素直でよろしい。では現在位置から。ここは狭間の世界と言われる一種の保管庫です。ここには様々なものが集められ、随時必要な場所へ送られます。そして集められるものは武器や本といった物から、知識など目に見えないものまでにわたり、あなたのような力を持った存在も収集の対象となります」

俺は荷物じゃない。意思を持った人間だ！

……ん？ あゝ、いや、訂正する。意思を持った、元・人間だ！

「ごもつとも。でも意思があるからこそ重要なのです」

……どういうことだ？

「それは『なぜ送るのか』を説明したほうが早いでしょう」

じゃあ、続けてくれ。

「……急に素直になるとちょっと不気味ですね」

茶化すな！ さつさと話を進めろ！

「ハイハイ、では進めますよ。」

なぜ送るのか、それは世界の『停滞』を防ぐためです。我々には絶大な力を持ったものもありますが、残念ながら直接世界に干渉することが出来ません。ですから力を持った物、もしくは存在を送り込むと言っわけです」

……そういうことか。

要するに、俺はお前達の代理人といったところだな？

そして、結果次第で俺を元に戻すと。

「理解が早くて助かります」

一つ質問がある。いいか？

「どうぞ」

なぜ目的を話した？ 年齢を弄られた腹いせに何もしないかもしれないぞ？ それと送られた矢先に自殺するかもしれん。さらに言うなら、積極的に干渉しまくってその世界を滅亡に追い込むかも知れんぞ？

「いい所に気がつきましたね。」

まず何もしない、する前に命を絶つ、についてですが問題ありません。送った、という事実がすでに干渉したことになります。ですから目的は達せられているということです。次に過干渉についてですが、これも問題ありません。我等が嫌うのは『停滞』であってその

世界の『結末』には興味ありません。その住人の勝手です」

ひどい言い様だなお前達。

まあいい、納得した。

「……一つ、お聞きしてもいいかしら」

どうぞ

「あなた、途中から私のことを指して『お前達』って言ってるわね。それについての質問はしないのかしら？」

……どうせ答えられないんだろ？

なんかお前下っ端くさいし。

「下っ端って失礼ね！ちゃんと部下もいるわよっ！」

ハイハイ、中間管理職様でしたか。

「キイイッ！腹立たしいわねっ！って、早速呼びがかかったみたいよ」

唐突だな。

「あ、そうそう。私のこととか私達の目的なんかは忘れるから」

って待て！そんな重要なことをさらっと言っなっ！

「大丈夫。記憶の不一致はテキストに誤魔化されるから。それと、あなたの武器もこちらで保管してるから、ちゃんと召喚してあげて

ね。それじゃ、いつてらっしや〜い」

待て！ まだ！ 話が！ 終わって！
なあああああああああああ！？

「バイバイ」

シュポン

「さて、今回はなかなか楽しめそうだからじっくり見物しましょう
と」

第一話 召喚術師と侍従（前書き）

実験要素が強いので読みにくいかもしれませんが

第一話 召喚術師と侍従

魔王イルンテスは混乱している。今の自分が置かれている状況に見慣れない天井に。自分には不釣り合いなベッドに。部屋の各所に据えられた豪華な調度品に。そして何より、自分を心配そうに見つめる二対の瞳に対して。

「お、お前、体は大丈夫か？　どっか痛いところはっ！？」

紅色の瞳を持つ少女が問いかけてきた。

肩まで伸びた栗毛色の髪がとても印象に残る。身長はそれほど高くない。俺より頭一つ分低いといったところだろうか。体型はローブのような服装のせいかもしれないが、良く言ってスレンダー、悪く言えば貧乳だ。顔にもどこか幼さが残る。全くもってそそらない。俺が少女を観察していると、もう一人の女性が声をかけてきた。

「お加減はいかがですか？」

声のした方に目を向けると、柔らかな笑顔の女性が立っていた。たれ目から覗くその瞳は薄い緑色をしており、腰まである黒髪は背中ですつと纏められている。背丈は俺と同じくらいといった感じだ。黒と白を基調にしたメイド服を着ており、腰の左右には不自然なフリルがあしらわれている。そしてなにより目を引くのはその胸だろう。一言で言えば大きい。こう、手で掴んだらこぼれそうなほど大きい。

視線に気が付いたのか、彼女は顔を赤くしてうつむいてしまった。

「人の侍従をいやらしい目で見ないでよっ！」

凶星なので黙るしかなかった。

今のやり取りを考えるに、どうやら少女は彼女と常日頃から一部
分において比べられているらしい。しかも強制的に。

雰囲気が重苦しくなってきたので話題をすり替える事にした。

「……あんたら誰だ？」

「人に聞く前に自分で名乗りなさいよ！」

そりゃごもつとも。

一つ咳払いをして、

「俺の名前はイルンテスだ。他にもいろいろ肩書きがあるんだが
……。こっちじゃどうせ通用しないだろう」

むしろ『魔王です』なんて言ったら怪しまれる。

「イルンテス……、じゃあイルね！ 私はエイラ。エイラ・サキ
ユーテ。あなたを召喚した召喚術師よ！」

そう言っただけで凄いだろ、と胸を張る。

「あ、うん、すごいね」と適当に相槌を打って、エイラの奥にい
るおっぱ……じゃなくて、奥にいる女性に目を移す。

また胸を凝視されると警戒したのか、腕を使って大きくて立派な
ソレを隠そうとする。その仕草がたまらなくかわいい。

警戒心が前面に出ていて会話が成立しないので、

「そちらは？」

と、軽く訊ねた。一瞬「なぜ？」みたいな顔をしたが、エイラに
促され、スカートを軽く指でつまみながらかわいらしく、

「召喚術師、エイラ・サキューテ様の侍従、アリシャと申します。以後、お見知りおきを」

と挨拶付きで自己紹介してくれた。

一通り互いの名前を確認したところで、さっきまでの重苦しい雰囲気は霧散していた。いい傾向だ。

「では、エイラ。俺を召喚したのは君なんだね？」

「ええそうよ」

まだ胸を張っている。いい加減疲れないものだろうか。

「重ねて訊く。俺の体が傷だらけなのはなぜかな？」

「うぐう」と唸って言葉に詰まるエイラ。

召喚の方法に問題があったのか、それともエイラの力量不足だったのかはわからないが、召喚時にダメージを受けたと見てほぼ間違いないようだ。

体のことを訊いたのだ。ついでにもう一つのほうも訊いてみよう。

「体についてもう一個。なんで俺は若返ってるんだ？」

怪我よりもこっちのほうが切実だ。

体の感じからして随分若返ってるのだろう。魔力がいつも以上に充実していることから、おそらく絶頂期なのだろうと推測する。そしてその時期は、俺にとってもっとも恥ずべき時代であった。ここは怒り狂うところなのだろうけど、なぜか怒りが沸いてこないのも謎だった。

返答を待って、ただじつとエイラを見つめていると、肩が小刻み

に震えているのに気が付いた。「どうしたんだ？」と声を掛けようとしたら、それをさえぎるようにエイラが突然ブツンしてしまった。

「えーえー、失敗しましたよっ！ そーですよ、派手に暴走させましたよ！ 全部私のせいですよ！ 全部が全部私が悪いのよっ！」

ひとしきり怒鳴り散らした後、アリシャに抱きついて泣き出してしまふ。子供かお前は。

仕方なくアリシャに視線をずらすと、

「とりあえず、お茶にしましょう」

と言って、エイラを腰にくっつけたまま、器用にお茶の準備を始めた。

何か重要なことを忘れているような気がするけど、まあいいや。

第一話 召喚術師と侍従（後書き）

苦情がなければこんな感じで

第二話 呪われた国

静かにお茶をすすする。紅茶とは違うらしく青々しい草の香りが鼻腔をくすぐる。鎮静作用でもあるのか、エイラは急速に平静を取り戻していった。アリシャのなだめ方も堂に入っている。

「……で、ここはどこか訊きたいのだが……」

聞き出したのはいいが、エイラの説明は自慢が多分に入っているために割愛する。

現在地はラーナード王国首都、ノードの王城の敷地内に建てられている召喚殿の客室。召喚殿とは、実際に異界からの召喚を行う儀式室、召喚した物を管理・保管している宝物室、召喚術師のための客室、召喚した生物を閉じ込めておく捕縛室の四つに分かれている。さらに儀式室は物を召喚する部屋と、生物を召喚する部屋に分かれているらしい。なんでも召喚陣が違うそうだ。ちなみに俺の場合、召喚後すぐに捕縛室に送られるはずだったのだが、人の形をしていて満身創痍だったので治療のため客室に通されたそうだ。

「ここがどこなのかは分かった。それで、なぜ俺を召喚したんだ？」

この質問に対して、エイラの回答は「王の命令よ」の一点張りだった。

こちらとしては『誰に』命令されたのではなく、召喚された『理由』を知りたいのだが……。どうやら彼女はそこまで知らないらしい。ため息をつき顔を両手で覆うと、もじもじしながらアリシャが声を掛けてきた。

「あ、あのう、推測が混じりますけどよろしいですか？」

「……事実もありますよね？」

彼女はコクリと頷く。

さすが、どこぞの平野と違って双子山はできる！

そんな失礼極まりないことを考えながら、彼女の丁寧な説明に耳を傾けた。

「現在、ラーナード王国は隣国であるシャターン帝国と戦争状態にあります。両国の国境線は険しい山脈と、戦争の契機となった中央平原のみです。今までは春と夏に交戦し、秋は収穫のため、冬は積雪のため事実上の休戦状態でした。そしてそれは微妙な均衡状態を作り出していました」

ここまで聞いてある程度の予測はついた。だが彼女の話はまだ終わらないようなので黙って続きを聞くことにする。

「事が起こったのは三年前の冬です。この時期は両軍とも進軍がままならないはずなのですが、帝国軍は侵攻してきました。この時はなんとか撃退することができました。軍部の見解ではたまたま、もしくは無謀な強行軍とみなされました。しかし一昨年と去年の冬にも侵攻してきました。さすがに何かあると感じた軍部は、雪解けと同時に調査を開始、そして発見しました。三つの砦を」

砦が作られた。つまりは均衡が崩れたと言っているだろう。

しかし、彼女は砦と断言したがおそらくそれは間違いだ。冬場は雪に埋もれると言っても、中央平原とやらは戦場だ。偵察は冬でも出していたはずだし、砦なんて建てようと思っただけの準備だけで気がつく。……もちろん無能でなければだが。

と、ここで疑問が沸く。皆もどきの”場所”だ。

「……訊きたいのだが、冬は平原全域に雪が積もるのか？」

「？ いいえ、積雪は中央から南、張り出した山脈にかけてに集中しています」

間違いない。北と西に最低一個ずつ。皆ほどの規模ではなくて物資と人員の中継基地だろう。もしかしたら町や村に偽装していて、見つかったとき一気に防御壁を築いたのかもしれない。最後の一つは、王国と帝国の直線距離上、春と夏の戦闘で見つかっていないことを考えると山脈寄り、もしくは山脈の中にでもあるのではないだろうか。

この国、もうだめなんじゃないかな。そんなことを考えつつ、アリシャの話の続きを聞く。

「皆の出現により均衡は破られました。一年間の戦争状態が伸び、兵の損耗率は上がり補充率が下がりました。タルマ商連合国との陸路が断たれてしまい、海路のみとなったことで物資が限られ、それに伴い経済が停滞気味です。さらにここ数年不作続きで税収が減少しています。そして、生活に苦しいものが野盗となり、治安が乱れています」

訂正します。この国、どう考えても終わりです。

兵がない、物が無い、金がない。ないないないの三拍子で詰み。帝国に滅ぼされるかその前に自滅するかどちらかだ。よしんば、帝国を撃退し停戦に持ち込んだとしても、ちょっと安定したらすぐ革命だろう。どの道この国に未来はない。

「そして、ここからが推測なのですが……」

おいおい、まだあるのか。なんとも業の深い国だ。

「この国は内部分裂を起こしているようです。具体的には存じませんが、多数の派閥が存在するようなのです」

たぶん、戦争大好き集団と命が大切集団にでも分かれているのだろう。複数になったのは、頂く頭が違うぐらいの理由だろう。とにかく国の寿命をさらに縮めている。救われない。

「進退窮まった。だから、全てを打開するために召喚の儀が執り行われました」

すると何か？ 俺は関わりのない国の劣勢を覆すために、国民の支持を取り戻すために、その後は政治家どもの傀儡になるために呼び出されたって事か。

アイシャが黙ってしまったために、エイラが朗々と語りだす。

「そこで私の出番と言う訳よ。今回使用した召喚陣は特別製で、ある一定の力を持っていないと召喚することができない。つまりあなたには力があるのよっ！」

ビシッ、っと俺に人差し指を向けるエイラ。その顔は得意満面で自分の力を思い知ったかといった態度である。

そして大きく息を吸い込み、宣言するかのように言い放った。

「あなたはこの国を救うべく、『勇者』として召喚されたのよっ！！」

やっぱりか。

そうつぶやいてテーブルに突っ伏した。

この国は運が悪いのだろうか。

いや違う、これはもはや呪いだ。

最後の希望を託して召喚した者が勇者ではなく、

真逆の『魔王』なのだから。

第三話 行動開始・前（前書き）

しばらく間が空きました。
ごめんなすって

第三話 行動開始・前

その後、アリシャの説明で俺の立ち位置が明確になってきた。

そもそも召喚されるものは無作為であり、実際にやってみるまで何が出てくるか分からないらしい。そのうち生き物は、最低限三種類には分類できるそうだ。

一つ目は一番多く召喚されてきた獣だ。一般的には霊獣と呼ぶそうだが実はあまり知られていない。それはなぜか？ 答えは簡単、すぐに死ぬからだ。人間よりも力を持っているが、所詮は獣。知恵が回らないため敵に突っ込み自爆。もしくは対策を立てられて二回目以降の戦闘であえなく討ち死に。援護しようにも敵味方の判別が甘いので、下手に近づくと敵と一緒に蹴散らされてしまう。その結果、戦果は全て運用部隊のものになり、霊獣たちの活躍はなかったことにされる。稀に野生化することもあるそうだが、制御を離れた霊獣は危険なだけなので狩られてしまう。どちらにしろ生き残れないのだ。よって生きて人々の前に姿を見せることがないので、知名度は低い。

二つ目は全体の一割強程度を占める聖獣と呼ばれているものだ。大抵は龍や一角馬ユニコーンなどの力が強く知性もあるもので、時折神獣などの名で歴史に出てくこともある。霊獣とは比較にならない能力を有しており、戦場に現れれば味方の士気は最高潮に達し、敵のそれは下がり続け、最終的には壊走に繋がる。欠点としては自尊心が高すぎるところだろう。扱いを間違えると敵味方の分別なく多大な損害が出る。それが原因で滅んだ国や、停戦せざるを得なかった国は数多い。ちなみに、現存している聖獣は好き勝手に暮らしており、各国は生息地付近には近寄らないようにしている。正に『触らぬ神

に祟りなし』状態だ。

最後に俺のような人型であり、尚且つ対話が可能で相互理解できるもの。これらは本当に希少で、全体の五分にも満たないとか。また、何れも能力が高く歴史に名か傷痕を残すらしい。さらに通称も個々人の能力や適性によって変わってくるそうだ。

武に優れ勇猛果敢に敵を蹴散らすものを『勇者』、知識に秀でて国の発展に大きく貢献したものを『賢者』、存亡の危機に現れ奇跡とも思える手腕で人々を救うものを『救世主』、愚王を断罪し大陸を統一せんとするものを『覇者』と呼ぶらしい。そして、己の欲望に忠実で戯れで世界を滅ぼそうとするものを『魔王』と呼ぶそうだ。

俺の場合、戦争に打ち勝って国を栄えさせるのを目的に召喚されたのだから、勇者か賢者といったところだろう。差し当たり戦が先だから、エイラは俺のことを勇者と呼んだのではないだろうか。

と、ここで一つ疑問が浮上する。

「ところで、なぜあんた達はそこまで知っているんだ？」

「え？ どういう意味よ？」

俺の質問に対して、二人は別々の反応を示した。

エイラは質問の意味自体が分からないようだ。

一方アリシャは、一瞬だけ俺を品定めするような目つきになったが、すぐにさつきまでの”侍従の顔”に戻った。……もしかしたらこの巨砲ちゃん、思ったよりも厄介かもしれない。次からは発言に注意しよう。

「ちよつと分かりにくかったかもしれない。もうちよつと詳しく質問するわ。」

今のあんた達の説明だと俺の前にもたくさん召喚された奴らがいるはずだよな？ だったらなぜこの国はこんな状態なんだ？ 俺の前の奴らは一体何をしていたんだ？ さっきの口ぶりだと勇者とか賢者とかいるんだろ？」

ちよつと質問の意味を捻じ曲げる。エイラは基本的に鈍感らしいが、アリシャのほうは勘が鋭いようだ。彼女には俺の情報をなるべく隠しておきたい。

「なんだそんなことか。それは簡単。あなたが開戦後、初めて召喚されたからよ。」

……いえ、正確にはこの国初の人型と言った方がいいかしらね」

ここでアリシャが口を挟んできた。
彼女達はなにか用事があるらしい。

「お嬢様、そろそろお時間です」

「もうそんな時間？ ではまたね勇者イルンテス」

「ああ、また。いろいろありがとうな」

笑顔で手を振るエイラ、それに答える俺。
本当に貴重な情報ありがとうよ、お嬢さん。

ここまでで重要なのは、この国の現状、彼女達の情報量、俺が始めての人型、この三点だ。でも、まだ足りない。これだけの情報では推測どまりになってしまふ。何か決め手がほしいな。できれば裏付も。

何の気なしに窓から外を眺める。街を見下ろす形になった。おそらく小高い丘にでもこの召喚殿は建てられているのだろう。俺はたぶんここから出られない。出してもらえないと言ったほうが正確か。

兎にも角にもやることは決まっている。

まずは情報だ。文字や言葉などはもちろんのこと、この国を動かす人間のこと、他国の噂など、いろいろ必要だ。

問題は手段だ。自分で動くのは論外だし、人を雇おうにもここから出られないので接触できない。何か解決策はないかと、部屋の中をグルグル歩き回りながら考えていると、不意に自分の鎧が目に入った。鎧といっても最低限急所を隠すのみのもので、唯一の例外が大きく張り出した肩の装甲だろう。ちなみに、色は黒でところどころ銀の装飾がしてある。

使えるのだろうか？

そう思いはしたが他に方法がない。物は試した、やってみよう。鎧に手を触れる。一瞬、何かを吸われる感覚に眩暈がしたがすぐに立ち直る。

大丈夫そうだな……

魔力は通った。近くになじんだ波動を感じる。しかし懐かしんで

いる場合ではない。

俺はすぐに”彼ら”に対して命令を下す。

「情報がほしい。文字、言葉、この国の上層部、派閥の詳細、有事の際の逃走ルート、可能ならば国外のも。可能な限りすばやく」

小声で短く簡潔に用件を伝える。

誰も答えない。だが、了承したというのは分かった。

カタタッ

黒い鎧がかすかに揺れる。

それと同時に懐かしい気配達が遠ざかっていった。

第三話 行動開始・前（後書き）

次、投稿したら新しく始めるかもしれません。
もしやるんなら হচ্ছেます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1122i/>

近くて遠い異世界

2010年10月9日16時35分発行